

Title	昭和十二年秋期 金澤福井方面旅行記
Sub Title	
Author	西岡, 秀雄(Nishioka, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.16, No.4 (1938. 4) ,p.199(697)- 204(702)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0199

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

91同

鹿笛

(毛利松平氏・中島權六氏寄贈)

92アイヌ弓 (慶應義塾圖書館出品)

93アイヌ物入れ (慶應義塾圖書館出品)

94北海道石器時代壺(大石・町田コレクション)

昭和十二年 秋 金澤福井方面旅行記

十月八日午後九時、上野驛發金澤行の急行列車で、雨天を衝いて指導教授伊木壽一先生と共に、學生「堀野満治、金川太郎、高島正純、中井信彦、齋藤威、西岡秀雄、鈴木泰平、若櫻木叡、川村善三郎、山口文夫、淺村一郎、清水秀雄(長野驛ニテ乗車)」十二名出發。尙、大學院の保坂三郎君も上野驛より翌九日金澤附近見學迄行を共にされる。

上野驛頭に清水潤三君が吾々を見送る。一同寢臺車前部を占領し、元氣旺盛にして雑談に花は咲き、容易に寝ようともせぬが、十二時近くなるや、明日の見學に備えて無理に寝る。夜中の二時過ぎ、長野驛にて清水秀雄君が乗車し一行に参加する。

九日午前八時十分金澤驛着。

昨夜の雨も何處へか消し飛び、秋の日差しも麗らかな旅行日和である。驛前より自動車三臺に分乗し、出外気分の高れる金澤の街を通り抜け、先づ當市南方の大乗寺へと向ふ。當寺は弘長三年當樞家尙の創建にかゝり、最初は眞言であつたが、弘安六年永

平寺三世徹通、讓を受けて禪家開山となり、その後、曆應二年足利尊氏之を祈願所とし、尋いで後柏原天皇の御時、勅願所とせられ、東香山大乘護國禪寺の號を賜はつたといふ北陸に於ける曹洞宗の古名刹である。もと野々市村にあつたが、元祿十四年現地に移され、七堂伽藍が整つたのである。驛より約二十分にして當寺へ着く。中興開基と云はれる二十六世月舟の「金獅峯」と書ける額を掲げし山門をくぐり、一室に通され住持の老師出で、挨拶の後、いよいよ古文書拜見となる。

先づ國寶五山十刹之圖を見る。紙本墨畫二卷にして、南支那の名刹中、徑山、碧山、雲隱金山、育王山、蔣山、天童山、何山等の諸山に就て、殿宇の構造、様式及び堂内の設備佛具の形狀等、種々の方面に互つて特色あるものを摘出して圖示せる所の、支那禪刹繪卷である。

次に道元入宋中手寫といふ一夜碧岩錄(集)上下二冊(薛繪箱入)を見る。一夜碧岩錄の事は文化三年「建搦記圖會」にも見えて居る。

尙、當寺には、尊氏の此の大乗寺長老に宛てし觀應二年九月廿二日付の御教書を始め、義詮の文和二年七月二日付御教書、義滿の明德四年七月十日付御教書、義持の應永十九年十一月十日付御教書、義教の永享二年十二月二日付御教書、義政の長祿二年八月廿三日付御教書、義植の永正十四年六月二日付御教書や、細川勝元の出せる長祿二年十二月廿四日付禁制、及び貞和二年丙戌四月十六日付地頭藤原家善の寄進狀等を納めたる一巻がある。其の他當寺にて見學せる古書類を列擧すれば次の如くである。

一、三老和尚直筆 一卷

嘉元四年丙午八月廿八日 前任大乘寺 義鑿

正中二年中秋八日 洞谷講附 紹瑾

正中二年八月一日 永光紹瑾

一、永平高祖眞筆 六祖法寶壇經 一卷

(箱蓋裏) 卍山和尚代置焉箱袱子慈麟和尚代新添

一、大智禪師墨蹟 一幅

南無天滿大自在天神

一、大乘中興記 (正徳元辛卯歲霜月廿八日) 一卷

一、花園恭贊、信甫花押畫「渡唐聖像」 一幅

一、朝鮮佛畫 絹本 一幅

(本像韓國全羅南道綾州郡雙峰寺所藏明治四十二年九月受之爲紀念寄附云々)

一、兆殿司小涅槃像 一幅

一、大乘聯芳志 一册

(現住白龍重録書き出し、昭和二年九月五日寂第六十五世前任住徳翁大龍和尚まであり)

元祖 孤雲三大尊行狀記 一册

一、洞谷清規 永享六年歲甲寅春二月日拜寫 一册

一、開山徹通和尚之像 絹本 一幅

一、支那畫 絹本花鳥 二幅

其他あれども略す。午前十時十五分見學を終り、青竹の眺め良き庭を顧みつゝ寺を辭す。

待たせて置いた自動車に分乗し、日本三公園の一つ兼六公園へと向ふ。百間堀の石川門前で自動車を降り、先づ兼六公園の北に接して居る金澤城址を望む。金澤城のあつた所は、昔は本願寺の門徒の宗門を擴張せる尾山城のあつた所であるが、後に織田信長の命により佐久間盛政に攻略され、其れが後に豊臣秀吉によつて前田利家に與へられ、文祿年間には前田利長大いに城壘を修築して金澤城と改稱し、江戸時代を通じて外様大名の偉風を示した大城であつたと云はれるが、今は第九師團司令部・第六旅團司令部・歩兵第七聯隊司令部等あり、舊城郭は僅かに石川門と其の近傍に二層樓及び濠址を存するのみである。従つて金澤城址は見るもの無く直ちに案内人を一人雇ひ兼六公園に入る。當公園は金澤城東方の丘陵を利用して文政二年前田齊廣の開けるもので、洛陽名園記の、「園圃之勝不能相兼者六、務宏大者少幽邃、人力勝者少蒼古、多水泉者艱眺望、兼此六者惟湖園而已」と云ふ句に因り、宏大・幽邃・人力・蒼古・水泉・眺望の六を兼ねてゐると、松平定信(白河樂翁)が推賞して兼六園と命名せるものである。先づ下坂口より霞ヶ池へ出る。池の周圍三六〇米餘、池心に龜甲山または蓬來島と稱する小島がある。水は多數の鯉のために濁つて居るが、水汀には名高い微軫燈籠ミヅナがあり、東部の丘には唐崎松がある。其處を東へ進むと千歳臺と稱する展望廣き場所へ出で、市街を脚下に見て、遠く日本海の蒼波が望まれる。千歳臺には乙葉松・鹽竈櫻、また雁行橋畔には旭櫻と稱する名木がある。又、日本武尊の銅像の前方には、天然記念物指定の菊櫻があり、更に東すれば曲水と呼ばれる小流を見、その中の小洲を鶴鴿島と云ひ、民俗學關係の

男女石がある。これより成巽閣の北部を廻り、金澤神社の傍に金城靈澤と稱する金澤の地名の起源になつた古井戸を見る。これより再び霞ヶ池の南方へ進み、観月臺と呼ばれる小丘の下を通り、瓢池へ出る。池の中洲には高サ四米餘の六層石質の海石塔が建つて居る。秀吉が征韓の役に獲得して利家に贈つたものと云ふ。池には高サ六米幅一米半位の那智瀧を真似たと稱する翠瀧と云ふのが落ちて居る。池畔には夕顔亭あり、亭前に邯鄲手水鉢あり、高人酔臥の彫刻がある。亭後の松濤阪を上り噴水のある常盤丘を通り下坂口へ戻る。斯くて下坂口の附近より市電で丸越デパートに至り中食を済まし、午後一時二十一分金澤驛發列車で栗津へと向ふ。途中小松驛にて保坂君は一行より別れて織田劔神社へ向はれる。

午後二時半栗津にて温泉電軌線に乗り換へ、三時十五分那谷寺驛へ着く。驛より南方へ徒歩十分にして那谷寺に至る。養老元年泰澄の草創と傳へる眞言の古刹にして、寺名は那智と谷波とから採つたものといふ。石英粗面岩や角礫岩の突兀たる岩壁に本堂大悲閣が建立されて居る。尙、鎮守堂・稻荷堂・三重塔・護摩堂・鐘樓等種々の建物があるが、時間の都合により大悲閣の外は、その外観だけを見るに止め、また寺寶も割愛し、庫裡に屬する小庭園も、庭石全部碼礫石を用ひ名勝として指定されて居る名園であるが、此れも瞥見するのみにて那谷寺驛へ急ぐ。

午後三時四十五分那谷寺驛より電車に乗り、途中河南驛にて乗換へ、午後四時二十分、大德行基發見の傳説を有する山中温泉に着き、町の中央で大聖寺川の溪流に臨める旅館「聽泉閣」に泊る。

時節柄旅客は少く、古來最も脚氣に效くと云はれる温泉に入り、「山中や菊はたをらぬ湯のほひ」と芭蕉の句を味はひ、夕食後活氣を失へる町を一巡してから靜かな眠りに入る。

明くれば十日、今日も天氣は上々である。朝食を済ました一行は朗らかに朝日を沿びて、町の南方の名所蟋蟀橋を見に行く。大聖寺川の谿間に架した古風な橋で、奇巖怪石の間に紺碧の清流と云つた景致は所謂名所であるが、橋の稱呼の起原が、秋宵蟋蟀のすだく音いとも哀れな爲めであるとか、或は行路極めて危かつたからであるとか云ふに至つては極めて危い語源説である。

午前九時電車にて山中温泉を發し、大聖寺驛にて九時四十五分當驛發列車に乗換へ、午前十時半福井驛に着く。驛前より三臺の自動車に分乘し、福井市西南方にある眞宗大谷派の淨得寺に向ひ、驛より十五分ばかりにて着く。鄭重な持成しを受け、狩野永徳筆の國寶世界及日本圖六曲屏風一雙を見、其の他土佐光業筆親鸞聖人繪傳（絹本）二幅、牧溪畫「雲龍」六曲一雙、教行信證等を見て、十一時五十分當寺を辭去する。直ちに新田義貞を祀る別格官幣社藤島神社に參詣し、寶物は時間の都合で殘念ながら割愛して高い石段を下り、次に安政六年六月幕府に捕へられて江戸小塚原刑場の露と消えた橋本左内の墓に詣でる。妙法山善慶寺といふさやかなる寺の境内に、景岳先生之墓と刻せる墓石が立つて居る。これより自動車を急がせて足羽山公園へと登る。當市の西南部に隆起する丘陵を利用して造られた公園にして、此處より望めば全市一眸の裏にあり、市街を貫く足羽川及越前平野、遠くは加賀の白山までが眺められる。山上には足羽神社、水道貯水池、招

魂社及繼體天皇御石像等があるが、肝心な中食所が無いので、公園を一巡して下り、自動車之急がしめて、午後一時三十五分相當空腹を感じて一行は大丸百貨店に着く。

午後二時福井驛前よりバスに乗り、九十九町にて下車し緑町の浄土宗安養寺を訪れたが、婦人會の會合で取り込み中のため寺寶の國寶阿彌陀三尊二十五菩薩來迎圖等を残念ながら見學出來ず、直ちに近くの玉井町心月寺を訪れたが、此れも住職不在にて見學不能に終り、相生町にある柴田勝家の菩提所西光寺に赴く。

本堂の後に勝家の墓所あり、石祠中に五輪墓あり、摧鬼院殿台嶽還道大居士と勝家の法名が刻してある。又、墓側の小堂には勝家の眞黒な木座像がある。金幣馬印も當寺にあるが、年に一遍しか公開せぬそうで此れは實物を見る事は出来なかつた。

當寺前よりバスにて福井驛へ戻り、午後三時十五分福井驛發東尋坊口行三國芦原電線に乗る。途中新田塚驛附近を進行中の車中よりは、新田義貞戦地の地が見える。建武の昔鎌倉に北條高時を誅した義貞も、その後尊氏の謀叛となつて、延元三年此處藤島郷澄明寺囀の露と消えたのである。今は田園の鬱蒼たる老杉の下に一字の廟祠が淋しく建つて名將の最後を物語つてゐる。

福井驛より電車約一時間にして東尋坊口驛に着き、此處よりバスにて十分餘で東尋坊に至る。唐人を防いだ事より昔は唐人防と書いたと云ふ。日本海へ突出せる此の一帶の海岸は、安山岩が多く六角形の柱狀節理をなし、海蝕を受けた自然の奇勝をなして居る。一同紀念撮影して後、海女の人魚振りを見學する。と云ふと大變感じ良いが、實際は頭に手拭を巻き、白い襦袢に腰巻きのオ

バサンが、ジャボンと水に飛び込んで海の底から小形の榮螺などを拾つてくるので別に美的でも無く、寧ろ見てゐて氣の毒である。水中で堪へた呼吸が空中で爆發してヒューヒューと口笛の様に聞こえ、見物人の投げ與へる五錢拾錢の銀貨に競つて又水へ潛つて行く。遠くの海面には雨雲が低く垂れこめ、茶屋の主人は、明日は九分九厘大雨ですと濱慣れした天氣豫報に一同明日を觀念し、バスにて再び東尋坊口に戻り、電車に乗り蘆原驛で降りる。此處蘆原は其の名の如く昔は蘆の茂つた沼澤地であつたのを、明治十七年、井戸を掘つた所突然温泉の噴出となり、新温泉場となつたと云ふ。紅屋と稱する旅館に泊る。温泉は無色透明の鹽類泉で、其の效能は多量のラヂウムエマナチオンを含み各種の疾患に良いが、殊にヒステリーに效くとあるのは痛快である。とにかく微に硫化水素臭を放つ良く暖まる温泉である。山中温泉よりも温泉場らしく又品も良い。最後の晩だと云ふので一同相當に騒ぐ。

明ければ十一日、大雨との東尋坊の天氣豫報も何のその、カンカン朝日が輝いて居る。朝食を済ました一行は勇躍宿を立つ。時に午前八時三十分。蘆原驛より電車にて永平寺へと向ふ。途中福井口にて乗り換える。午前十時十分永平寺門前着。

永平寺門前驛より新しく成れる參道を徒歩約十分にして總門に達する。これより永平寺境内に入る。森嚴の氣稍迫る。永平寺は曹洞宗の大本山にて、寛元年間の創建にかゝり、開山は道元禪師である。通用門をくぐり總受附に至り、案内を受けて寶物館を見る。本山七百年來祕藏せる寶物を陳列してある。其の主なるものを挙げれば次の如くである。

- 一、後圓融天皇宸翰〔國寶〕 一幅
- 一、〔日本曹洞第一道場〕紙本墨書
- 一、文晁筆「釋迦文殊普賢」 三幅
- 一、加藤四郎左衛門景正作「抹茶々碗」 一幅
- 一、蘇東坡筆「一叢竹」 一幅
- 一、唐吳道子末流之筆「觀音大師應現」 一幅
- 一、宅磨爲遠筆「日天子月天子」 一幅
- 一、雪村筆「十六羅漢」 三幅
- 一、本山地勢古圖（二百年前） 三幅
- 一、禁裏御撫物 四櫃
- 一、銅鐘〔國寶〕（嘉曆二年八月廿四日鑄造） 一口
- 一、弘法大師作「不動明王尊像」 一幅
- 一、兆殿司筆「十三佛」 一幅
- 一、福井附近城主諸侯之文簡 一幅
- 一、永平寺諸法度 一幅
- 一、李龍眠筆「羅漢圖」 一幅
- 一、高祖承陽大師「自贊御肖像」 一幅
- 一、二祖孤雲禪師佛前供養手巾 一卷
- 一、傳光明皇后御寫經 一幅
- 一、中御門天皇御宸翰（懷紙） 一幅
- 一、明治天皇勅額「承陽」 一幅
- 一、有栖川宮幟仁親王御筆「法王法」 一幅
- 一、天竺古代經簡（貝葉） 一幅
- 一、高祖大師御笈 一幅

彙報

一、曾我蕭白筆「寒山拾得圖」 一幅

一、安道上人筆「彌陀三尊二十五菩薩」 一幅

寶物館を出るといよいよ當寺の七堂伽藍の見學となる。諸堂多くは近年の再建になるも、さすがに曹洞宗大本山だけあつて堂々たるものである。

先づ傘松閣と稱する全國末派寺院並に檀信徒の接待所に案内される。昭和五年に二祖禪師の大遠忌に改築したもので、百數十疊敷の廣さを有し、天井は日本現代に於ける一流畫家の繪二百三十枚を集めて出來て居り、仲々立派なものである。次に全國檀信徒の遺骨を納めし舍利殿に通ずる大祠堂殿を見る。全國檀信徒の數の日牌月牌等が安置された牌壇あり、臨時法要等も行ふ所にして、前の傘松閣と同じく昭和五年に新築された莊嚴燦爛たる位牌堂である。此處より特に勅使參向の爲に建てられし勅使門を老杉の間より望み見る。天保十年に改築されたとも云ふ。次に東司を見る。要するに便所であるが、此れも七堂伽藍の一つである。次に僧堂を見る。同じく七堂伽藍の一つにして雲堂とも稱し、本山僧衆の日夜坐禪及び食事をなす所謂修業道場であり、多數の修業僧が正座して食事をして居る。相當粗食にして、朝はお粥に味噌汁、晩と夜は麥飯に澤庵と云つた調子で、多少カロリーの事が營養學的に心配となり、中食は當寺で精進料理を御馳走してくれると云ふが期待も出來ず、十二時近いが寧ろ一同食慾減退氣味となる。僧堂より七堂伽藍の中心たる佛殿（一名覺王寶殿）へと行く。迦葉佛・釋迦牟尼佛・彌勒尊佛と過去現在未來の三世の佛像が須彌壇上に安置され、その中央には今上陛下の聖壽牌を奉安して居る。

寶祚の長久を祝禱するためである。左右の別壇には達磨大師、大權菩薩及び本山開祖承陽大師の本師たる支那天童山如淨禪師の像が安置してある。建築は明治三十五年の改築といふ。次に承陽門を通り承陽殿を見る。開祖承陽大師道元の眞廟である。それより七堂伽藍中樞要の所なる法堂へ行く。天保九年に改築されたもので、諸般の法要儀典を行ふ所だそうである。次に大光明藏を見る。百疊以上の廣間にして、所謂說法場である。大光明藏には尙不老閣や妙高台御座所等が接續して居る。これより監院寮を通り、大庫院へ行く。大庫院は七堂伽藍の一つにして庫裏とも稱するが、地下室とも五階建てにして、賓客の接待所として瑞雲閣と稱する大小幾多の部屋を有する所あり、最も特筆すべき事は料理場附屬として蒸氣機罐場を持ち、浴室に連絡し、又冷蔵倉庫もあり、更に電氣エレベーターをも設備してある。當寺は境内に發電所をも有して居る。傳統を重んじ稍もすれば古くさい感を感じる寺院にも拘らず、又、都會から遠く離れた山中にありながら、斯くの如き文化的諸設備のある事は一つの驚異であり、拂子を斜めに抱いた袈裟を纏へる僧侶が、エレベーターで昇降せる有様は夢想だにしなかつた所である。最後に一同は山門に案内される。三門とも稱し、七堂伽藍の一つであり、樓上正面には應安五年後圓融天皇より恩賜せられたる日本曹洞第一道場の勅額が奉掲してある。寛永二年の建築と云ふ此の門樓に登れば、釋尊及び十六羅漢五百羅漢が勝手な顔をして並んで居る。

斯くて本山諸堂を大體一巡し終つた一同は、三階建ての小庫院にて茶菓のもてなしを受け、精進料理の御馳走に與る。二の膳付

きで、僧堂に於ける修業僧の食事と比較すれば、問題にならぬ饗應振りであり、精進料理と稱するも大したものである。お膳の脇には當寺寫眞帳等の御土産まで用意されてあつた。

午後一時三十分當寺を辭去し、境内の玲瓏の瀧を見て永平寺門前驛へと向ひ、二時二十九分當驛發福井行電車に乗り、二時五十分福井驛に着く。斯くて三日間に互る有益且つ想ひ出深き見學旅行を終了し、各自此れより自由行動として再び元氣に思ひ思ひの所へと向ふのであつた。

(昭和十二年十一月八日西岡秀雄記)